

故関川前委員長を追悼する

日刊
動労千葉

87. 9. 5

No. 2647

国鉄千葉動力車労働組合

千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五〇六（公衆）〇四七二二二七二〇七

動労千葉の闘いをさらに前進させ 胸をほって生きられる社会を創る

九月一日、二三時四〇分すぎ、動労千葉初代委員長・関川幸さんが、入院先の成田日赤病院において逝去されました。享年六一歳でした。一九七三年の第二四回定期大会以降、五期十年にもおよぶ長きにわたって委員長職を務め、とりわけ、動労「本部」との組織攻防戦、分離独立の闘いを最先頭で闘い、さらに、三里塚反対同盟との血盟を誓って闘いぬいた「81・3ジェットスト」など、様々な闘いを指導された関川前委員長の勇姿は、今もなお組合員の目に焼きついていることだろうと思います。動労千葉は、関川前委員長の生前を偲び、ここに深く哀悼の意を表すものです。



関川さんが委員長を務められた五期十年は、まさに闘いにつぐ闘いの連続でした。

関川さんは、動労千葉が、たかろう労働組合として脱皮し、今日への歩みを開始しはじめた、その生みの苦しみを経験していた時期、地本の委員長に就任されました。以降、関川さんは、誰からも愛される温厚な人柄と、「熟慮断行」を座右の銘とするとおりの思慮深い決断力、指導力をもって、常に私たちを導いて下さいました。

今日の動労千葉があるのは、ひとえに関川さんのおかげであると言っても過言ではありません。一九七〇年以降、動労中央による動労千葉地本破壊の策動が激しさを深めるなかで、当時の千葉地本は五回もの臨時大会のすえ、執行部が総辞職してしまふという混乱した事態のなかにありました。七三年九月八日、二四回地本大会において、委員長に就任されたのが関川さんでした。

委員長就任後の関川さんの御活躍はめざましいものでした。動労革マルとの組織攻防戦を高血圧の持病をおして最先頭で闘いぬき、就任二年目の一九七五年六月十日には、運転保安闘争の指導責任を問われ、不当にも解雇されました。

一九七八年の第三四回動労津山大会では、代議員、傍聴団に対するあらんかぎりのテロ・リンチ

が振るわれました。しかし、この大会が実は、関川さん自身が後に語られているとおり、「動労千葉結成の決意を固めさせた全国大会」として、組合員全体が、くやしさを決意に変える大きな転換点になっていったのでした。

私たちは、関川さんの指導の下に、分離独立への決意を大きく推進させ、ついに、一九七九年三月三日、「国鉄千葉動力車労働組合」を結成させるに到ったのです。

その後も動労革マルの「オルグ団」と称する破壊部隊との闘いに勝ちぬき、あの歴史的な81・3ジェット燃料貨車輸送阻止闘争における五日間のストライキに至るすべての過程を、あるときには叱咤し、あるときは激励し、そして常に組合員と共にあって指導して下さったのは関川さんでした。関川さんこそが動労千葉の礎石を定め、動労千葉の名を全国に高めて下さったのでした。

八三年の第八回動労千葉定期大会で委員長をとりぞかれて以降も、動労千葉OB会事務局長、動労千葉顧問、三君を守る会代表など多くの重責を歴任されるなど、その業績ははかりきれません。関川さんは委員長時代をこう語っています。

「十年、まさに激動の嵐の中での十年であり、この十年間は、様々な勉強をし、心強い共闘の絆の広がり、多くの闘い先輩と指導を受ける人々に恵まれ、さらに有能な執行部の諸氏と組合員の団結に支えられた十年であった」と。

関川さん、私たちは、貴方の教えを守り、十万人首切り攻撃というこの嵐をもみごとにのり越えました。これからも茨の道のりです。しかし、私たちは関川さんの遺志をついで、国鉄労働者が、胸をはって生きることのできる世の中を創りあげるまで闘いぬく決意です。今後とも、雁針盤のよりに私たちの進むべき方向をお示し下さい。どうぞ安らかに眠り下さい。